

## 学位請求論文審査報告書

氏 名 岸 上 仁

論文題目 初期唯識思想における菩薩の課題

—『大乘莊嚴經論』第19章「功德品」にみられる因相(nimitta)の概念を通して—

審査委員 主査 大谷大学教授 箕 浦 暁 雄

博士（文学）[大谷大学]

副査 大谷大学教授 山 本 和 彦

Ph.D. [University of Poona]

博士（文学）[大谷大学]

副査 大谷大学名誉教授 宮 下 晴 輝

副査 滋賀医科大学名誉教授 早 島 理

博士（文学）[広島大学]

### I. 論文内容の要旨

本論文は、『大乘莊嚴經論』第19章「功德品」の考察を通して、衆生と共に老病死の苦を越えるという菩薩の課題が唯識思想の形成にどのように関係しているのかを解明しようとした研究である。

こうした研究課題に取り組むに際して、本論文は nimitta（因相）という概念に注目する。阿含以来、「自分の顔の因相」や、無相心解脱について「一切の因相を作意しない」と説かれるように、対象をとらえた結果として顕れるような対象の特徴を意味する。また、因相は縁 (paccaya) の同義語であると言われ、何かが生みだされる根源の意味で用いられている。前者は「結果としての因相」、後者は「原因としての因相」と言える。『瑜伽師地論』「菩薩地」においても、言語表現によって捉えられた特徴としての因相（結果としての因相）と、その言語表現の原因としての因相の意味がある。さらに、因相から分別が生じ、分別から因相が生ずるという表現で、因相は分別の原因と結果の両方を表す。

『解深密経』では、saṃskāra-nimitta（諸行の因相）という表現を用い、それは依他起性であり分別の活動領域であると説く。『瑜伽師地論』「撰決択分」では、因相と分別は異ならないと述べる。因相が依他起性であるとの説明は、縁の同義語という阿含の用例の延長線上の表現と見なし

てよい。因相に「諸行」という語を加えた諸行の因相という語は、縁起的存在としての因相を強調した表現と考えられる。『大乘莊嚴經論』にもそれは引き継がれ、基本的に因相は依他起性であり虚妄分別であると説明される。しかし一部において遍計所執性と説かれる例もある。一方、清浄なるものの原因も因相と表現され、雑染と清浄の両方を成り立たせる根拠として因相という語が用いられている。本論文は、以上のことを踏まえ『大乘莊嚴經論』第19章「功德品」の考察へと論を進める。

『大乘莊嚴經論』第19章「功德品」第48偈において「すべての利益を成就するために」と説き、安慧釈も自利利他の成就であると言及する。如実遍智とは、自身の苦の滅のみならず、衆生と共にという課題を持っている。そればかりか、第19章「功德品」の中でも最後に如実遍智に言及する偈で、仏土清浄について説く。『大乘莊嚴經論』第7章「威力品」(漢訳 神通品)第7偈では、智の自在性によって水晶や瑠璃などからなる仏土を見せ、仏陀の名を聞かせ、衆生は仏陀の名の欠くことのない世界に生まれることを仏土清浄として説示する。これは、衆生の側からすれば仏道の歩みの出発点であり、仏陀の側からすれば仏道の成就に他ならない。こうした仏道の出発点と仏道の成就が同時に成り立つのはいかなる場所であるのか。この課題があるからこそ仏土清浄について語る必要がある。そして、この課題に対して、器世間のあり方という点からすれば、「住処という因相」という表現で確かめ、そこで何を経験するのかという点からすれば「受用にとっての因相」という表現で確かめようとする。よって、この言説もまた仏土清浄の背後にある課題と言える。

この器世間については、『大乘莊嚴經論』第19章「功德品」第49偈で「住処という因相」として現れた器世間に束縛されると説かれる。同品の第55偈では、仏土清浄を障げるような器世間の現れについて説かれ、それらは遍智して断ずべきと説かれている。転依によって器世間のあり方がどのように変わるのかが問われている。

識という点から受用を問題にするのは、仏土における受用が、仏道の出発点と仏道の成就が同時に成り立つような経験の内容だからである。『大乘莊嚴經論』第19章「功德品」第49偈によれば、受用にとっての因相は識の対象である五境であり、心心所はここに束縛されることになる。一方、『大乘莊嚴經論』第9章「菩提品」第43偈によれば、対象 (artha) が転回し、土を清浄にすることにおいて欲するままに受用を示現することになる。『大乘莊嚴經論』第17章「供養親近無量品」(漢訳 供養品・親近品・梵住品)第13偈では、菩薩は仏土において法を聴聞し、衆生の成熟とともに仏土が清浄になると説き、衆生と共にある受用が課題となっている。

そのような仏陀と衆生との同時性を成り立たせる概念として「無住処涅槃」の術語が確立してきたという可能性が考えられる。『大乘莊嚴經論』第2章「帰依品」では、帰依という点からすでに無住処涅槃について触れる。また、第9章「菩提品」第45偈では、住処の転回におけることとして「無住処涅槃」と表現し、第17章「供養親近無量品」第32偈世親釈には、智と悲の点から無住処涅槃についての言及がある。さらに、第19章「功德品」第60・61偈では、摂大乘についての十項目の中に、因相、無因相を越えた第八地において、無功用に行ずるものに関することとして無住処涅槃に言及する。因相を断じ、無因相を求めるような声聞や独覚のあり方は、流転を離れられないあり方を厭うという点からすればあらゆる点で自在ではない。流転を離れた自己と流転を離れられない他者とを分けるあり方である。このような仕方、仏陀と衆生との同時性を障げることを問題にしている。声聞や独覚とは対照的に、菩薩は厭うのではなく悲 (karunā) を持って応答する。流転を悲しむからこそ、涅槃に住せず、流転を離れない。しかしまた、智があるから、流転に住せず、涅槃を離れない。無住処涅槃の概念は、このように因相を滅することにおける菩薩の課題を背景にして定立されている。

『大乘莊嚴經論』第19章「功德品」と同じ章題を持つ『瑜伽師地論』「菩薩地」のうち「菩薩功德品」も如実遍智を説くが、無住処涅槃については触れない。「菩薩地」の「真実義品」も同様に無住処涅槃について述べない。したがって、第19章「功德品」では、無住処涅槃という課題をもって如実遍智を論じ直していると言える。

智によって因相（流転）を断ずるという側面から見れば、因相のとおり「ある」と見ることが遍計所執性であり、識が対象を把握したことによって現れる「結果としての因相」が否定されている。一方、無住処涅槃という概念を用いて述べるような、悲によって離れない流転の事実という側面から見れば、縁起的存在として因相、つまり依他起性であり識が起こる「原因としての因相」があるという否定し得ない事実を如実遍智するという点が強調されている。転依が意味することは、その事実としての因相（流転）を離れて無因相（涅槃）を求めるのではなく、その事実をそのまま涅槃と捉えることにある。したがって、その「原因としての因相」があるという事実を識という点から見れば、その識を離れずに意味が変わるすなわち識が智に変わることを言うために、離れない識を何らかの形で表現することが要請される。そこで、雑染と清浄という両者の原因としての識、すなわち縁起的存在の根拠となる縁識、つまりはアーラヤ識が要請されるという可能性を考えることができるであろう。『中辺分別論』の中で「因相」をアーラヤ識と言い、『大乘莊嚴經論』第19章「功德品」で「種子という因相」をアーラヤ識と表現するのは、無住処涅槃

という課題の中で、如実遍智すべき因相の内容をアーヤ識という概念を用いて確かめるという意図が背景にあったにちがいない。

以上の考察から、『大乘莊嚴經論』第19章「功德品」における如実遍智をめぐる一連の記述は、因相を滅するという内容を無住処涅槃の観点から、より厳密に論じたものである。さらにその無住処涅槃の背景には、仏陀と衆生の同時性がどこでどのように成り立つのかという仏土清浄の課題があると考えておいてよい。本論文はこのような結論を提示する。

なお、本論文の第二部には、『大乘莊嚴經論』第19章「功德品」(第47偈から第63偈)のテキストと現代語訳が掲載されている。

## II. 論文審査結果の要旨

本論文の特徴は、唯識思想の識論を構成する重要な概念の一つに *nimitta* (因相) という概念があるということに注目したことである。唯識思想が十分に展開した浩瀚な論書である『大乘莊嚴經論』の中で、唯識思想の識論に *nimitta* という概念がどのようにコミットしているのかを、丁寧に洗い出して論じている。さらにまたそれに先立って、『大乘莊嚴經論』以外の文献に見られる *nimitta* の概念をも合わせて論じていて、*nimitta* という概念がどこでどのように論じられているのかがほぼ明らかになったとすることができるだろう。この点こそ本論文の大きな功績と見ることができる。とはいえ、因相の概念を整理する際に、菩薩の修道階梯の各段階ごとに因相がどのように説かれているかという視点で整理することも考えなければならないであろう。まだ他にも検討しなければならない点があるように思われるが、本論文の分析は十分に評価できる。

無住処涅槃とは、流転にも住さず涅槃にも住しない仏道を表す言葉である。それは、大乘仏教が目指す究極の目標である無上正覚の内実を表現したものとすることができる。本論文が取りあげた『大乘莊嚴經論』の第19章「功德品」は、この無住処涅槃を、住処(世間)の転回による自在性の獲得という意味をもつものとして、唯識思想のなかに位置づけたものである。菩薩道の課題を、識論としての教義学において解明しているとも言することができる。『大乘莊嚴經論』は、流転と涅槃を、*nimitta* (因相) と *animitta* (無因相) として捉えかえし、識の転回という思想のなかで、*nimitta* と *animitta* の意味の転回、すなわち流転と涅槃の意味の転回を明らかにして、無住処涅槃が達成されるとする。本論文は、これらのことを、他の章で論じられた事柄との関連に言及しながら取りあげて論じている。この点については、従来十分に解明されてこなかったことでもあり、高く評価することができる。

本論文の独自性は、仏陀と衆生との同時性を成り立たせるものとして無住处涅槃という術語が成立しているという点を重く捉えて『大乘莊嚴經論』を読み解こうとするその解読の視点にある。菩薩は、流転 (saṃsāra) を離れた自己と、流転を離れられない他者とを分けるという姿勢を持たない。流転に対する悲 (karuṇā) があるからこそ涅槃に住せずに流転を離れない。智があるからこそ流転に住せず涅槃を離れない。こうした位置に菩薩は立つ。菩薩にとっての課題は何かという視点を外すことなく初期瑜伽行唯識学派の教義学が読み解かれなければならないという本論文が貫こうとする着眼点は、非常に重要である。そして、本論文は、因相をめぐる雑染と清浄との両側面を確認して、無住处涅槃が課題としてあるからこそ如実遍知すべき因相をアーヤ識という概念成立の背景として見定められることをも視野においている。本論文は、即断すべきではないと慎重な態度をとる。それでもなお、アーヤ識の起源について言及する際には、本研究が取り上げた雑染と清浄という観点だけではなく、さらに丁寧に論ずべきことがある。例えば、ランベルト・シュミットハウゼンによるアーヤ識に関する研究をどう受けとめるべきか。あるいは、荒牧典俊が提案した阿含系統と弥勒系統という二つの系譜を前提に瑜伽行唯識学派における教義学を捉えるという提案についてどう考えておけばよいか。まだ論ずべきことが残されている。

さて、『大乘莊嚴經論』第 19 章「功德品」の詳細な解読は、いまだ残されてきた研究課題のひとつであった。それを真正面から扱ったことに対して一定の評価を与えてよい。近年、例えば、早島慧による第 6 章「真実品」の解読、内藤昭文や能仁正顕による第 17 章「無量の章」の解読、岸清香による第 18 章「菩提分品」の解読などが次々に提出されてきた。『大乘莊嚴經論』に関するこれら個別の研究を十分に踏まえて考察すべきであったとの指摘もできる。

また、本論文は、サンスクリットやチベット語原典の校訂をより丁寧に厳密になすべきであった。精密なテキスト批判は必須である。あるいは、本論文で言及されていない重要な二次文献がある。これらは惜しまれる点である。

以上の通り、本論文は、『大乘莊嚴經論』第 19 章「功德品」の解読を中心にすえ、初期唯識思想における菩薩道に迫ろうとした研究である。いくつかの課題を残しているとはいえ、きわめて難解な文献の記述を整理することを通して、初期瑜伽行唯識学派の中で菩薩の課題がどのように見定められていたかに迫ったという点は十分な評価が与えられてよい。

審査に必要とされる最終試験については、審査委員全員により 2019 年 12 月 20 日に試問を行った。その結果、審査委員一同一致して、岸上仁に大谷大学博士 (文学) の学位を授与することが適当と判断した。